

パレスチナとクナーファとある日本人青年について 第一回

富澤規子

初めに

2025 年 7 月 24 日、フランスのマクロン大統領はパレスチナを国家として承認する決意を SNS 上で発信した。以来、この一か月で欧州諸国を中心にパレスチナの国家承認への意向表明が連日報道され注目されている。

2025 年 8 月現在では、193 カ国の国連加盟国のうちすでに 147 カ国がパレスチナを国家として承認しており、日本国は未承認のままだ。

パレスチナが独立国家として承認されれば、承認した多くの国々と国際機関にとっては、パレスチナは同等に肩を並べる存在になる。

第一次中東戦争と、その後のイスラエルによる占領で 70 万人以上の難民を出して以来、パレスチナは常に支援や援助、また同情の対象であった。

一方、いつまでも長く終わらず成果が不明瞭にみえる支援に対して、日本人一般の関心は薄らいでいる。デモや抗議集会への参加は日本人一般にはハードルが高い。

凄惨なニュースが繰り返されるほど、一民間人にできる支援はもはや募金ぐらいしかないように思えてしまう。

パレスチナの隣国エジプトに長く住む私にとっても同様だった。アラビア語が多少できたところで、何ができるわけでもなく、また何かをする機会もない。

2023 年の「10 月 7 日」以来、パレスチナが受ける被害状況は連日報道され、日本国内の抗議活動の様子も SNS に上がるようになったが、それも他の多くの報道に押し流された。

富士見トンネル「クナーファ屋」

パレスチナの惨状を知りつつ何もしない私に、パレスチナについて何か書こうと思いなおす切っ掛けを与えてくれた日本人青年がいる。

一橋大学にほど近い共同店舗「富士見トンネル」の水曜日、彼はシェアキッチンのカウンターに立ち、クナーファを焼く。その名の通り長細い「富士見トンネル」店内は、多種多様な出店者のメニューの邪魔にならぬよう、コンクリートの打ちっぱなしと木材のシンプルな内装である。

水曜日には、そのカウンターに「NABLUS」と書かれた絵皿が飾られる。ナーブルスは中東菓子的一种クナーファで有名なパレスチナの都市名である。

水曜日に営業する店の屋号は「クナーファ屋」。焼き立てを提供するために、小さなフライパンで一つ一つ焼く、彼が独自に生み出した方法だ。大きな平皿で焼く現地スタイルとは違うので、この店は「創作クナーファ」を名乗っているが、エジプトでクナーファに夢中になった私から見ても、彼が焼くクナーファは現地と比べて遜色がない。



店内に飾られた絵皿と山田氏が焼くクナーファ

「NABLUS」と書かれた絵皿について彼に聞く客もいれば、まったく関心をしめさずクナーファとおしゃべりを楽しむ客もいるが、店主はわざわざパレスチナについて話題を持ち出すこともない。菓子が焼け、コーヒーが沸く穏やかな香りに包まれて、客はみなりラックスをしている。

おそらく中東関係に携わる者ならば、パレスチナに無関心な一般の人々のすぐ傍らに、パレスチナの都市名が書かれた絵皿が自然にある空気感に、驚かれるのではないだろうか。

この空気感はクナーファ屋の店主が意図的に作り出したものだ。

店主の名は山田柊（やまだしゅう）氏と言う。

学生時代の支援活動の紆余曲折をへて、パレスチナと同等に肩を並べる存在となるために、クナーファを焼く道を選んだ日本人青年である。

写真展「『ノー・アザー・ランド』のその後」にて

「クナーファ屋」店主山田氏は水曜日以外でも月に一度か二度ほどイベントでもクナーファを焼く。パレスチナ支援のイベントもあれば、そうでない飲食店とのコラボも、どちらも多い。

2025 年 8 月 28 日から 31 日まで、藤沢市のカフェシネマ「シネコヤ」にて『ノー・アザー・ランド 故郷は他にない』が上映され、それにあわせて写真家森裕一氏の写真展「『ノー・アザー・ランド』のその後」と上映後のアフタートークが開催された。

映画『ノー・アザー・ランド』は、マサーフェル・ヤッタ村落を襲撃するイスラエル軍と入植者に対して抵抗するパレスチナ人の姿を 2023 年 10 月までの 4 年半を撮影記録したドキュメンタリー映画である。2025 年のアカデミー長編ドキュメンタリー映画賞を受賞している。日本での封切りは 2025 年 2 月で、大変ショッキングなシーンが続くにも関わらず年齢制限はされていない。

森氏は 2024 年から 2025 年にイスラエルとパレスチナを取材し、撮影地の人々の「その後」の様子を詳細に記録し、撮影している。アフタートークでは多くの写真動画とともに現在の惨状を観客に報告し、アフタートークの後も、イエメンコーヒーを提供

しながら、観客達とコーヒーについてや現地の文化について、質問されるがままに答えていた。

シネコヤのオーナー竹中翔子氏によると、『ノー・アザー・ランド』上映は定員 22 が連日満席になるほどの盛況とのこと。森氏のアフタートークを目当てに観客が集まっているためではないかと竹中氏は言う。

実際、私が訪れた 8 月 30 日では、上映後に席をたつ観客はおらず、彼らは森氏による「10 月 7 日」以降の現地報告に耳を傾けていた。

この日は、山田氏もクナーファ販売でイベントに参加している。シネコヤ店内の一角にガスコンロを置き、客の目の前で焼きながら出来立てを販売する。珍しい菓子ということもありテイクアウトの注文もは入り、山田氏が用意した 40 食は完売した。

映画を見ずにクナーファだけを求めにくる客もいて、上映時間よりもかなり早い時間に来店し購入しているとのこと。

シネコヤの竹中氏は、クナーファ目的で来店して、『ノー・アザー・ランド』を見ずに帰られる人がいても、その人が美味しいと味わった菓子が実はパレスチナにつながるといつか気づいてくれればそれでいいと言う。



山田柊氏（左）と写真家森裕一氏（右）

シネコヤは地元のパレスチナ支援の方々とガザ関連の上映を数か月に一度開催している。その支援者を通して山田氏と知り合い、今回のイベント開催となった。竹中氏は直接支援に携わるつもりはなく、生活の身近のなかで文化的なアプローチを自然な形でと望んでおり、山田氏の「クナーファ屋」にはシンパシーを感じると語る。

一方、写真家森氏は都内のアラブ料理イベントで、山田氏と知り合った。森氏はパレスチナだけでなく、イエメンやヨルダン、ウクライナなど多くの戦場を取材し、その惨状をダイレクトに発信している。その点で、山田氏とは真逆の姿勢のようであり、やはり山田氏の活動に共感するところは多いそうだ。

その一つが「食文化」である。

マスメディアだけでなく SNS を通してあふれる多くの情報は、やはり断片でしかなく、自分とつながる世界の出来事だとは感じにくい。大切なのは経験を共有することだが、日本にいる日本人が現地を経験する方法は限られている。しかしイエメンコーヒーの香りや味わいならば、日本人にも経験ができる。そこから興味関心を広げて、いつか戦時下の人々にも深い関心をもってくるようになれば、と森氏は語った。

そして今回の上映『ノー・アザー・ランド』はあまりにテーマが重いので、クナーファとコーヒーを用意して、少しでも観客の緊張を和らげようという意図があったのだそうだ。

上映とアフタートークの後、カフェコーナーに下りてきた観客達はクナーファの甘さとコーヒーの香りで癒され、一息ついてから帰路についた。

カフェコーナーに展示された写真にショッキングなシーンはなかったが、撮影されたこの人たちは今でも無事でいてくれるだろうかと、願わずにはいられない。

来場した人々は、イエメンコーヒーとクナーファを食した経験と、上映映画と展示写真の情報が、彼ら自身のなかで結びついたはずである。

観客は帰宅後、家族や友人に珍しい菓子を食べたことを話題にするだろう。そこから「それはパレスチナの菓子で……」と聞いた誰かがパレスチナに興味をもち、検索を試みようと思ってくれば、山田氏と森氏の目論見は的確だといえるだろう。

クナーファを自然なきっかけに

山田氏の目指すところは、クナーファをパレスチナを知るための自然なきっかけするところにある。

富士見トンネルでの水曜日営業での客層は、中東情勢よりは食文化全般にアンテナをはる女性客の方が多い。店内の会話を聞いていると、まだ珍しい菓子「クナーファ」を検索してたどり着いた客が毎週と言ってよいほど来店する。

そこで山田氏はクナーファについての説明をするが、パレスチナについての惨状や支援活動について自ら語りだすことはない。

一般の方々にとって、中東関係はやはり怖いものと言うネガティブなイメージがつきまとう。そういった人たちに対して、山田氏はクナーファを通して彼らが自分からパレスチナに、自然に興味をもつのを静かに待っている。

そして、日本人もパレスチナ人もいずれは同じ地平に立てると信じているのだろう。山田氏の目指すところは、支援する側とされる側の関係ではなく、互いに助け合う友人関係である。

山田氏の取り組みは直接的な支援以外にも、パレスチナに対して新しいアプローチがあると示している。これは、上の世代の支援家には、思いもつかなかった、あるいは実行には移せなかった道ではないだろうか。

次回より、山田氏がクナーファ屋を始めるに至った課程と、パレスチナでの修行の様子を紹介する。

富澤規子（とみざわのりこ）

Ahram Canadian University (エジプト)言語翻訳学部日本語教師。エジプト文化省立大学校アカデミー・オブ・アーツ大学院にて民俗学準修士号取得。いたばしボローニャ絵本館翻訳おはなしボランティア。おはなし会シリーズ「アラブのヤシの木(新宿区立大久保図書館主催)」2015 年から講師。